

1 こづばの単位

▼まとめ▲

■ ことばの単位

◆ たとえば、メートル法にはキロ（メートル）・メートル・センチ（メートル）・ミリ（メートル）などの単位があります。ことばについても、その意味や働きを考えるのに便利なように、基準となる単位があります。これを〈ことばの単位〉といい、大きい順にあげると、次のようになります。

- ① 文章
- ② 段落
- ③ 文
- ④ 文節
- ⑤ 単語

◆ 中でも、文節はあとに出てくる〈文の成分〉（↓②）と最も関係が深く、単語は同じく〈品詞〉（↓④）と最も関係が深い、ことばの単位です。

◆ 文節とは何か、単語とは何かをマル暗記するだけでなく、「この部分が文節だ」「これが単語だ」という形で、実際に文節や単語を見分けられるようになりましょう。

■ 文

◆ 文章を組み立てる単位で、短いなりに、一つのまとまった考えや気持ちを表す一つづきのことばを、文といいます。

- 1 わあい 合格だ。（感動文）
- 2 はやく 行け。（命令文）

3 いつ 会えるだろうか。（疑問文）

4 二度と 行かない。（平叙文）

5 あれが パンダです。（単文）

6 これが パンダの 食べる 笹です。（複文）

7 花が さき 鳥が 鳴く。（重文）

◆ 右の1～4は、文を内容のうえから分けたもの、5～7は、文を組み立て（構造）のうえから分けたものです。5～7は、〈文の種類〉（↓②）としてあとに出てきます。

◆ 文の終わりでは必ずことばが切れ、書くときは、ふつうそこに「。」（句点）をつけて切れ目であることを示します。いくつかの文が連続する場合は、句点から句点までの一つづきが文だ、と考えればよいでしょう。また、句点の代わりに、「?」（疑問符）や「!」（感嘆符）が用いられることもあります。

■ 文節

◆ 文の中で、それ以上小さく切ると発音するにも不自然になり、また、意味も取りにくくなるというようない区切りを、文節といいます。

- 1 山口君は 大きい。
- 2 大きい 鏡だなあ。

3 鏡のような 水面。

4 むずかしいので よく 考えて みる。

5 見るだけなら 無料です。

6 吾輩は 猫で ある。

7 ある 所には ある ものだ。

◆ 右の例で、それぞれ一字あけて示してあることばのまとまりが、文節です。文節のかんたんな見分け方としては、文の最初に置くことのできることばの前では必ず文節が切れる、と考えればよいでしょう。

◆ 文節の見分け方として、「ね」「よ」「さ」などの〈はさみことば〉を用いて見分ける方法もありますが、その方法だと、右の3などはまちがえやすいので注意しましょう。

◆ 4の〈みる〉、6の〈ある〉は、それぞれ「(物を) 見る」「(物が) ある」という本来の意味が失われているために、見分けがつきにくくなっています。これらは、〈補助語〉(↓②)として、あとに出てきます。

◆ 少し長い文では、意味のうえでとくに深い関係にある文節同士を一まとめにした方が分かりやすい場合があります。また、右の例では、4の〈考えて〉と〈みる〉、6の〈猫で〉と〈ある〉は、やはり、意味のうえでとくに深い関係にあるとあってよいでしょう。このような、二つ以上の文節から成る意味上のまとまりを、とくに〈連文節〉ということがあります。

単語

◆ 文節をさらに細かく分けた、意味を持つことばの最小の単位を、単語といえます。

1 おはよう。

2 白い／馬。

3 白い／馬 が／走る。

4 白い／馬 が／走っ た。

5 白い／馬 が／走っ て／いる。

6 勉強する／生徒。

7 お兄さん の／強さ には／かなわ ない。

8 雨戸 を／閉め て／よろしい でしょ う か。

◆ 右の例で、斜線は文節の切れ目を、一字あきは単語の切れ目を示しています。1は、一つの単語が一つの文節を作り、それがそのまま一つの文を作っている例です。最も短い文形ですが、長い文になると、数十あるいはそれ以上の単語から成るものも、めずらしくありません。

◆ 2は二つの文節から成る文で、それぞれの文節が一つの単語から成っています。あとに述べるように、6も同じ例だと考えてよいでしょう。しかし、1・2・6以外の例のように、各文節はいつも一つの単語から成るとは限りません。各文節が二つ以上の単語から成る場合も多いのです。

◆ 3・4・5で、〈馬〉と〈が〉が別々の単語であることは、2のように、〈馬〉が単独で一つの文節となることから分か

ります。「馬」を中心に考えれば「馬の」「馬に」のよう
にあとにくることはいつも「が」であるわけではなく、逆
に「が」を中心に考えれば「犬が」「人が」のように前に
くることはいつも「馬」だというわけではありません。つ
まり、「馬」と「が」とは、切っても切れない深い関係ではな
く、あくまでも別々の単語だということになります。

◆ 4の「走つ」と「た」が別々の単語であることは、5の「走
つて」を見ればすぐ分かることですが、「た」を中心に考えて
も「来た」「見た」「勝つた」のように前にくることは
必ずしも「走つ」ではありません。ここでも、「走つ」と「た」
とは別々の単語だということになります。

◆ そのほか、単語を考える際には、次のような点に注意しま
しょう。

a 「行つて」「や」「見て」のような場合、文節は必ず「て」
のあとで、単語は必ず「て」の前で切れます。つまり、
「行つて」／「見て」の、ようになるわけで、例
文5の「走つて」／「や」、8の「閉めて」／「が」、こ
れにあたります。

b もともとは二つ以上の単語だったものが一つの単語
のように使われているものを複合語みくごうごといい、ことばの
単位としても一つの単語としてあつかえます。例文8
の「雨戸」のほか、「ガラス戸」「かぜぐすり」「生まれ
つき」「心ぼそい」「思い出」など無数にあり、中には

「目の毛」を意味する「まつげ」、「田を返す」意味の
「たがやす」など、今では複合語であることさえ忘れ
られているようなものもあります。また、熟語じゆごや音読
みの漢字に直接付く「する」も、「——する」の形で複
合語として、つまり一つの単語としてあつかえます。

6の「勉強する」が、一つの単語、一つの文節になる
のは、実は、そういうわけなのです。「勉強をする」な
ら、「勉強 を／する」とします。(↓③)

c いわゆる接頭語せうとうごや接尾語せつびごは、独立した単語としてあ
つかいません。例文7の「お兄さん」(強さ)では、「お」
が接頭語、「さん」と「さ」が接尾語ですが、単語とし
てはあくまでも「お兄さん」(強さ)で、それぞれ一つ
の単語です。(↓③)

d 例文8の「よろしい でしょ う か」のように、
いくつもの単語が集まって一つの文節を作っているよ
うな場合は、とくに注意が必要です。どこで単語が切
れるかを見分けるには、文末に近い方から、少しずつ
文を短くすることを考えてみるとよいでしょう。「(し
よ)の基本きほんの形が「です」であることに気づけば、し
めたものです。



1 次の①～③は、それぞれいくつの文から成っていますか。文の区切りごとに句点をつけなさい。ただし、それぞれ、最後の文については句点をつける必要はありません。

① 太陽はいつも朝になるのが楽しみでした自分のすがたを見ておとなも子どももよろこんでくれるのがうれしかったのです。でも雨やくもりの日は別です自分はたしかにいます。ですがみんなには見えないのですから。

② いよいよ遠足の日がやって来ましたが覚めるといいお天気。の朝でした姉さんはたん生日のお祝いに紙に包んだ小さな物を雄二にくれました開けてみるとチリンチリンといひびきのする小さなずでした雄二はそれを服のポケットに入れたまま学校の遠足に出かけていきました。
(原民喜「たん生日」)

③ 君たちは生まれたときのことを覚えてるだろうかお母さんのおなかから出てきたときや初めておぎやーと声を出したときのことをそれから小学校の入学式のことはどうだろう校門の前で写真をとったことだけは覚えてるというような人はいるかも知れないだがくわしいことは忘れてしまっているはずだ生まれてから今までのことをすべて記憶しているなんて不可能なことなのだ。

2 次のうち、途中に句点をつけるかつけないかで、二つの文になったり一つの文になったりするものは、どれですか。番号で答えなさい。

① もちろんぼくらは一生けんめいににげたけれどもじきにつか

まっていたんだ。

② ライターがなければぼくらはまっくらな中で一ばん過ごさなければならぬところだった。

③ どうとうやつらがやってきたでもこっちだって準備はできている。

④ こっちは二人でどうにかする君はとにかく電話がつながるまでねばってくれ。

3 次の①～④について、文節の区切りごとに、例にならって斜線を書き入れなさい。

例 犬がほえる。 ↓ 犬が／ほえる。

① 森の外れから頭が一つのぞいた。

② きよりが近いので手に取るように見える。

③ 少し進むと立ち止まって後ろをふり返った。

④ お母さんの方をしばらく見ていた。

4 次の①～④を、例にならって、文節(斜線)・単語(横に—線)に区切りなさい。

例 犬がほえる。 ↓ 犬が／ほえる。

① 父と子はある湖の入りえのほとりへ出た。

② 一びきの子ジカがしげみの中からはね出してきた。

③ この子ジカが泳げることには不思議はない。

④ 美しいモデルたちがとつ然うごいた。